

「どうほう わ きょう
同朋和敬」

私が嫁いだお寺は、急な坂の上にあります。それを登りますと、中央アルプスや2千メートル級の山が一望でき、眼下には町並みが広がっているのが臨めます。

5年前、お寺の庫裡を建て直し小さなホールを建てました。庫裡ではなくホールと言いましたのは、畳敷きの和式風ではなく、多目的に使える講堂風といった造りだからです。椅子を並べて80人ほど入れます。建設した目的は、葬儀場を兼ねるようなことでしたが、最近では、寺での葬儀はほとんどなくなりました。門徒の方の訃報の知らせがあった時には、もう葬儀社が決まった後です。だから、お寺で葬儀が出来ますよとは言えません。そこで、どのように活用できるかを住職と話し合いました。私は、手芸教室とミニコンサートを提案しました。お彼岸や報恩講だけでなく、普段お寺に足を向けたことのないような年齢の人にも寺へ集まってもらいたいと思ってのことです。お寺に活気が出てきますと、同朋の会の人数も増え、法話会、役員会、おときの場など、寺が身近になってきたのは確かだと思えます。

このホールが出来た時、とても喜んでくださったYさんが最近亡くなりました。Yさんは法話会の開催に非常に熱心でした。寺の者には、あなた達だけの寺ではない。お寺は門徒の聞法の間だと、きっぱり言われました。お寺が葬儀と法事だけの場所だと思っているご門徒さんが多い中で、それに慣らされていた私達の姿勢を正された言葉でした。

ホールの玄関に、私の父親の筆跡で「同朋和敬」と書かれた看板が掛かっています。これは、住職が卒業した同朋大学の建学の精神の言葉です。「同朋」とは、親鸞聖人の「おんどうほう おんどうぎょう御同朋、御同行」の精神のことであり、名も無き田舎の人々と共に念仏の教えに生き、念仏申す人々を尊敬して「共なるいのち」を生きようとされました。その親鸞聖人が「わこく きょうしゅ和国の教主」と敬われたのが聖徳太子です。太子は「あつさんぼう篤く三宝を敬え」、「やわ和らかなるをもってたつと貴しとし」と言われました。私達は自分のことはわからないものです。人を見、人から見られて、自分の姿に気付くものです。このホールが聞法の道場として、人が集い、学び生きる場所として活用されることを願っています。